

☆ 札幌校

〒002-5802

札幌市北区あいの里5条3丁目1-5

HP : <http://www.hokkyodai.ac.jp/sap/>

☆ 旭川校

〒070-8620

旭川市北門9丁目

HP : <http://www.hokkyodai.ac.jp/asa/>

☆ 釧路校

〒085-8580

釧路市城山1丁目15-55

HP : <http://www.hokkyodai.ac.jp/kus/>

☆ 函館校

〒040-8567

函館市八幡町1-2

HP : <http://www.hokkyodai.ac.jp/hak/>

☆ 岩見沢校

〒068-8642

岩見沢市緑ヶ丘2-34

HP : <http://www.hokkyodai.ac.jp/iwa/>

★ 附属札幌小・中学校 特別支援学級（ふじのめ学級）

〒002-8075

札幌市北区あいの里5条3丁目1-12

HP : <http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/fujinome/>

★ 附属 特別支援学校

〒041-0806

函館市美原3丁目48-1

HP <http://www.hak.hokkyodai.ac.jp/~f-yogo-m/>

■ ほくとくネット（特別支援教育プロジェクト公式ホームページ）

HP <http://hokutoku.net/>



北海道教育大学 特別支援教育プロジェクト

☆札幌校 ☆旭川校 ☆釧路校 ☆函館校 ☆岩見沢校
★附属 特別支援学級（ふじのめ学級） ★附属 特別支援学校

文部科学省「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業（教職員育成プログラム開発事業）」

特別支援教育 育ちの原点を求め、発達の可能性を追求する

見たり、聴いたり、動いたり、字が読めたり書けたり、人の気持ちを考えたり
私たちがあたりまえに使っている能力がうまく機能しなかったどうなるでしょうか

「あたりまえ」から「人間の能力のすごさ」に気づいたら、
それは障害の理解と支援に向けての一步をすでに踏み出しているのです。

もくじ

□ キャンパスをのぞいてみよう

キャンパスの特色	1
札幌校	3
旭川校	5
釧路校	7
函館校	9
岩見沢校	11

□ 大学院をのぞいてみよう

大学院の特色	13
特別支援教育分野の特色	15
修士論文テーマ	17

□ 教育大学附属 学校をのぞいてみよう

札幌校附属 特別支援学級（ふじのめ学級）	19
教育大学附属 特別支援学校	23

□ 特別支援教育プロジェクトをのぞいてみよう

発達支援ツールの開発	25
人材育成	27
地域支援に関する実践	29
調査研究と情報収集	31
学生・人材育成	33
現場教育支援・遠隔地支援	35

□ ほくとかネットをのぞいてみよう

キャンパスの特色

札幌校

脳性麻痺や筋ジストロフィーなどの、重度の障がいのある子どもはもちろんのこと、自閉症スペクトラム・学習障害(LD)・注意欠陥多動性障害(ADHD)など、身近に支援を必要としている子どもへの教育方法や関わり方について、理論と実践を学びます。

釧路校

発達障害やさまざまな困難(不登校・貧困・虐待など)、生きづらさを抱えた子どもとその家族への福祉と協働できる学校教育のあり方を研究できます。子どものねがいをとらえる視座をもった教師を育てます。

旭川校

障害のある子どもたちとの関わりも重視したカリキュラムを組んでいます。特別支援教育の基礎知識をはじめ、検査・アセスメント、支援方法などの理論と、実践スキルを両立させた授業ばかりです。

函館校

いじめや不登校などの問題に苦しんでいる子どもや特別なニーズのある子どもの支援に先導的に取り組むことのできる教師を育てます。国際的な視野をもって、地域の教育課題を解決するための研究を行います。

札幌校 最新科学を実践に生かし、ひとりひとりの子どもに寄り添う

特

別支援教育分野では、「一人ひとりのニーズ」を見極めて、それに対応できる指導者の養成を目指しています。これまでの特別支援教育の歴史、心理アセスメント、個別の指導計画の作成などのほか、実践的な指導法を学ぶことで、特別な教育的ニーズを持つ子どもに寄り添いながら、発達を支援する力を身につけます。

札幌校の特色は、大学内の臨床教育施設に、子どもの特別なニーズに対応する専用の体育館、個別の指導室、遊戯室などの施設・設備を備え、学生が個別と集団の臨床活動にいつでも参加できることです。この実習では、実際に子どもを担当すると共に、スタッフの指導（スーパーバイズ）を受けながら、子どもたちの「困っていること」の解決に取り組んだり、発達の支援を行ったりします。卒業生の多くは、札幌市や北海道の特別支援学校、通常学校の教員として子どもたちの指導に当たるほか、福祉施設や地方公共団体（公務員）、教育関連企業などにも就職しています。



専用体育館での
インクルーシブ身体活動



遊戯室でのグループ指導
実践的な学びがいっぱい

特

別支援学校（知的障害・肢体不自由・病弱）と小学校の教員免許を取得できます。他にも中学校、高等学校、幼稚園教諭教員免許の取得、学校図書館司書教諭の勉強もできます。卒業生の多くは、札幌市や北海道の特別支援学校、通常学校の教員として子どもたちの指導に当たるほか、福祉施設や地方公共団体（公務員）、教育関連企業などにも就職しています。

教員紹介

教員	専門分野	研究内容
青山眞二	障害児心理	発達障害児における心理アセスメントと長所活用型指導
三浦 哲	障害児心理	支援を要する子どもの相互交渉能力の発達
安井友康	障害児教育	障害者の生活の質向上に関する研究 障害児者の地域生活、余暇・スポーツ活動支援
齊藤真善	障害児心理	高機能広汎性発達障害の対人認知特性 読み障害のメカニズムと効果的な指導プログラム
千賀 愛	障害児教育	特別支援教育の制度・システム アメリカの特別学級史、特別ニーズ教育史 ドイツの障害児教育、インクルーシブ教育の理論と実践
池田千紗	障害児運動発達	発達障害児の不器用さのメカニズムと支援方法 教育における作業療法士の活用方法



附属ふじのめ学級での
実践的な学び

教員からのメッセージ

安井 友康（障害福祉研究室）

学ぶ楽しさを自ら感じることで、それを子どもに伝えられる人材の育成を目指しています。一般に、特別な教育的ニーズを持つ子どもに接することは“特別なこと”だと感じてしまいがちです。しかし専門的な知識や実践を積むことで、“特別なことではなくなる”ことが重要なのではないかと思います。また実践と座学は相互に作用するものです。知識として学んだことが、実際にどのように生かされるのか、反対に実践で感じた疑問を解決するためにはどうすれば良いのか、そんなことを一緒に考えて行きたいと思っています。



旭川校 多様なニーズに応える特別支援教育

～最先端の理論から実践まで～

特

別支援教育分野では主として発達障害(知的障害を含む)のある児童生徒に対する教育・支援について学びます。しかし、「障害」の概念は幅広く、突き詰めれば、子どもたちの多様性を受け入れ、柔軟かつ適切に対応できる教師になることが目指されます。

多様な子どもに対応できる専門知識・技術を習得するとともに、子どもの視点に立って教育を展開できる教員を養成しています。

特別支援学校や支援学級だけではなく、通常学級を含めたあらゆる教育・福祉の場で活躍する人材を多く輩出しています。



ゼミ室での勉強風景



ゼミ風景

特

別支援学校教諭1種(知的障害)、小学校教諭1種の免許が取得できます。他にも幼稚園、中学校や高等学校校教諭免許の取得、学校図書館司書教諭や学芸員の勉強もできます。カリキュラムは発達障害(知的障害を含む)が中心です。特別支援教育の基礎知識をはじめ、検査・アセスメント、支援方法などの理論と、実践スキルを両立させた授業ばかりです。また、特別支援教育研究に特化した授業も受けることが出来ます。国内外の発達障害の分野の第一線で活躍されている先生たちの授業です！

教員紹介

教員	専門分野	研究内容
萩原 拓	特別支援教育	自閉症スペクトラムの包括的社会性スキル支援 発達障害のアセスメント法の検証・開発 地域関連機関と連携した発達障害の教育支援
片桐正敏	臨床発達心理学	発達障害のある子どもたちの 認知機能特性の解明と支援法の開発
蔦森英史	特別支援教育 認知心理学	発達性Dyslexiaにおける読み書きプロセスの 認知心理学的検討,及び介入方法の検討



キャンパスの四季



ボランティア活動での
キャンプ

教員からのメッセージ

萩原 拓 (特別支援教育分野)
旭川校の特別支援教育分野では理論と実践の双方の力量を高めてもらいます。国内でもこのキャンパスでしか身につけられない専門的な知識やスキルを学べます。学生は大学から飛び出し、様々なフィールドで乳幼児から成人までの発達障害児者と関わってもらいます。



釧路校 子どもの“生きづらさ”に寄り添う

発

達障害やさまざまな困難(不登校・貧困・虐待など)、生きづらさを抱えた子どもとその家族への福祉と協働できる学校教育のあり方を研究します。ゼミや講義など、大学内での学びとともに、地域の子どもの活動の場にも参加し、子どもの願いをとらえる視座をもった教師を育てます。発達障害を抱える子どもたちを理解し、彼らを支えるための実践について学ぶことはもちろんですが、本分野での学びはそれにとどまりません。すべての子どもを、自分自身の成長・発達を願う存在として捉えるための発達の基礎理論の学習、またそれらの願いを妨げるような現代の子どもが直面するさまざまな困難・課題についても学習します。そして、これらの困難・課題に対してどのような支援の枠組・制度があり、そこでどのような実践が行われているのかを学びます。児童養護施設や地域の福祉・子ども支援にかかわるNPO等での学習支援・生活支援の活動などにも参加し、子どもたちとともに活動しながら、子ども・青年の支援に必要な視点・知識を実地に学ぶことも大切にします。



遊具を使った実践的な学び



ボランティアでの実践的な学び

特

別支援学校教諭1・2種、小学校教諭1種の免許が取得できます。他にも中学校や高校教諭の免許が取得できます。

ゼミ:1・2年生のゼミでは、特別支援や子どもの発達に関わる基礎的な文献を読み進めます。また、レポートの書き方や文献・資料の調べ方など、アカデミック・ライティングの基礎を学びます。3年次以降、指導教員のゼミに所属し、自分自身の問題関心に即して調査・研究を進めていきます。卒業研究は、それぞれの興味関心や進路の希望に応じた個別の指導と、所属するゼミでの集団的な検討の両方を大切に、卒論指導を進めます。また、中間発表会や合同ゼミなど、随時研究室全体で議論・意見交換をする場を設け、論文の執筆をサポートします。

教員からのメッセージ



阿部美穂子(特別支援教育)

「一人一人の子どもの良さを引き出す教育を創ろう」努力だけでは解決できない苦手さや困難を抱え、他の人と同じ方法では能力を発揮できず、苦勞している子どもたちがいます。そんな子どもたちが、自分の力を信じ、自分と人を好きになれるように、学ぶ楽しさを味わい、生き生きと暮らせるように応援するのが「特別支援教育」です。本研究室では、理論的な学習と、実際に子どもたちとかかわる実践をスパイラルで積みかさねながら、教育者としての資質を磨きます。キーワードは“良いところ見つけ”と“Let's Enjoy!”。さあ、子どもも自分も楽しみながら、良さを伸ばす学びを一緒に創り出しましょう。



小淵隆司(障害児心理学, 臨床発達心理学)

「教師は子どもを変えることはできない」と言われたら、皆さんはどのように思いますか?そもそも、子どもとはどのような存在なのでしょう?子どもは、教師によって変えられる存在なのでしょうか?それとも、...?私は、大学での学びでは、自分の考えていることを知識や理論を操作して、思考することが大切だと考えています。物事や事象の一見自明のように見えることを「それって本当?どうして?」と問うことで、そのことの意味が変わることがあります。例えば、わからないことやできないことは、すぐに答えがわかり、解決した方がいいのでしょうか?「どうすれば、答えがわかるか、解決するか」という問い方をするか、「そもそも、わかるってどういうこと?その問題は、誰にとって問題なのか、なぜ、どのように問題なのか」を問うかによって、そのことの意味が変わります。「思考は常に難しさから生じる」のです。

木戸口正宏(進路指導・生徒指導)

私たちが日々学んでいるこの釧路・道東地域には、現代の日本社会が直面するさまざまな問題に正面から取り組み、新しい教育や福祉のあり方を作り出そうとするさまざまな人たちの営みが存在しています。リアルな現実と向き合いながら、持てる力を持ち寄り、地域の新しい力を創造しようとするさまざまな試みから、私たちは多くのことを学ぶことができるでしょう。地域の現実と格闘しながら、改めて「教えること」「学ぶこと」って何だろう?「学校」って、「教育」って何だろう?という問いを深めていく釧路校での学びは、あなたにとって、きっとエキサイティングなものになるはずです。みなさんとお会いできることを、心よりお待ちしております。

戸田竜也(特別支援教育, 教育福祉)

「なんで?」「どうして?」幼児には、こんな言葉でおとなを質問攻めにする時期があります。昔は、この時期を「質問期」と呼んだそうです。生活のなかで出会うさまざまな事象を子どもなりに理解したいという願いが、このような質問となって現れるのでしょう。月日は流れ、青年となった私たち。大学では、再び「なんで?」「どうして?」といった問いかけを繰り返す生活となります。たとえば、これまではあまり深く考えることがなかった小学校の先生の言動や教室の掲示物、はたまた子どもたちの登校場面でも、「なんで?」「どうして?」と考えることになります。あたりまえに過ぎてきた「学校」やそこに居る「子ども」のことを、大学で行われる講義・演習と結びつけながら、あるいは文献を参考にしながら、仲間と一緒に考えてみたときに、そこにある意味や理由、奥深さが見えてくるかもしれません。そんな学問のおもしろさをともに体験しましょう。



函館校 外国語指導と特別な支援が必要な子どもに対応できる教員

地

地域の教育的課題解決に主体的に取り組み、特にグローバル化する現代社会に必要な国際性を子どもたちに育成し、また、いじめや不登校などの問題に苦しんでいる子どもや特別なニーズのある子どもの支援に先導的に取り組むことのできる小学校教員を養成します。子どもが成長・発達する過程において生じる様々な教育問題を解決するため、国際的な視野をもって、地域の教育課題を解決するための研究を行います。

こんな人に学んで欲しい：小学校教員を目指す人、子どもが好きで、子どもはおもしろいと思っている人、学校が抱えている「いじめ」や「学力低下」等の問題に積極的に取り組んでみたいと思っている人、「発達障害」等の特別な教育ニーズのある子どもに対する適切な支援の仕方を学びたいと考えている人、「わかりやすい授業」とは、どのような授業で、どのように工夫すればいいのか知りたいと思っている人、「教育とは何か？」「子どもとは？」「何故学校に行くのだろうか？」といった疑問を解決したい人



地域の子どもたちとの触れ合い



子どもたちとの実践的な学び

特

別支援学校教諭1種(知的障害)、小学校教諭1種の免許が取得できます。他にも幼稚園教諭1種免許が取得できます。

現在の社会で、さまざまな形で「生きづらさ」を抱えている子どもは少なくありません。子どもの声や要求(ニーズ)・願い・意見表明をしっかり受け止め、応答する大人が、子どもの育ちにかかわるさまざまな場が存在することが、これまで以上に求められています。子どもの育ちを支える場を、学校や家庭に限定せず、地域社会や、福祉と教育という点から広く捉える視点を重視します。子どもの内面に寄り添い、見守り・伴走しながら、親・家族(教師も含めた大人も)とともに育ちあう、そのような実践や場をフィールドとして大切にしていきます。そしてそのような場とのつながりを踏まえた教育実践を、学校教育の場で担える教員の養成を目指します。学生みなさんとともに、研究室の学びを作り出していきたいと思ひます。

教員紹介

教員	専門分野	研究内容
五十嵐靖夫	障害児心理	学習における特別な支援を必要とする児童・生徒の指導方法について
北村 博幸	知的障害 発達障害	発達障害のある幼児・児童・生徒・学生の認知特性に応じた教育的支援に関する研究
細谷 一博	知的障害 共同学習	交流学习時における知的障害児に対する動機づけに基づく学習支援方法について

講義の紹介「発達障害児指導法入門」

北村博幸(知的障害、発達障害)

この授業では、初めに発達障害(LDやAD/HD)の特性や支援方法について講義を受け、発達障害の基本的な知識や支援方法を身につけることができます。また、実際に担当教員が経験した事例をもとに、学生があらたな支援を考えるという授業内容です。実際に教員が担当した事例なので、子どもの実態をイメージしやすく、また学生の数だけ指導方法や支援方法があるため、自分では思い浮かばないあらたな気づきを発見することができます。これから実際に、子どもと触れ合う前に子どもをイメージして様々な条件で支援を考えることは、教育実習などで子どもと直接かかわる際に大変役立つ授業です。



岩見沢校 スポーツを科学する 自然の中で環境問題を考える

スポーツ・コーチング科学コースはスポーツ指導の実践的能力の向上、地域におけるスポーツ活動の振興、冬季スポーツの活動の促進など、現代的ニーズに応える学生の育成を行います。そのためにスポーツスキル向上のメカニズム、コーチングの理論と方法などを学ぶとともに、技術・戦術分析法など数多くの専門的内容を習得します。

アダプテッド・スポーツ研究室：アダプテッド・スポーツとは、文字通り実践者の心身の状態にadapt(適合)させたスポーツのことです。例えば、「障害」という概念は個人が社会と接したときに困難が生じる状態と言えます。個人の心身の構造や機能は劇的には変えられなくとも、用具やルールを工夫することによって誰でもスポーツを楽しむことができます。当研究室では、この「誰でも」を達成すべく、スポーツ場面で生じる様々な現象の「なぜ」「どのように」を明確化し、より实际的で効果的なスポーツの実施方策について考察します。



車椅子を使った授業



小学校での授業

スポーツ・コーチング科学コースでは中学校教諭1・2種(保健体育)、高校教諭1種(保健体育)の免許が取得できます。他にも障がい者スポーツ指導員資格(初級)も取得できます。

アダプテッド・スポーツ研究室では、小学校や中学校での「アダプテッド・スポーツ授業」や「障害理解授業」等を実施しています。また「万人へのスポーツ普及」を目的として、市や民間企業と連携して「レッツトライ！アダプテッド・スポーツin岩見沢」等にも取り組んでいます。

教員紹介

大山 祐太(アダプテッド・スポーツ研究室)

○専門分野
アダプテッド・スポーツ

○研究テーマ
知的障害者のスポーツ活動における本人・指導者・保護者等の参加実態
地域社会・教育現場等におけるアダプテッド・スポーツの意義や可能性、実践方法



アダプテッド・スポーツ普及活動

岩見沢校では、恵まれたスポーツ施設・設備を活用し、アスリートのトレーニングなどパラリンピックスポーツの支援・普及活動を行っています。また、地域の誰もがスポーツを楽しむことができるよう様々な取組を通して、アダプテッド・スポーツの普及活動を展開しています。



視力の弱い方と一緒にできるゴールボール



手足を切断した方と一緒にできるアンプティサッカー

アダプテッド・スポーツクラブ

近隣の社会福祉施設と連携し、月に数回、本学体育館を活用したスポーツ活動を実施しています。参加者は、車椅子ユーザー、知的障害、自閉症スペクトラム、視力・聴力の弱い方、スポーツと一緒に楽しみたい・楽しさを伝えたいという本学学生など様々で、参加にあたっての条件はありません。「障害者のための」ではなく、「万人が楽しめる」ことを基本とし、用具やルールを工夫しながら、楽しく身体を動かしています。



スポーツクラブの活動

大学院の特色

高度教職実践専攻(教職大学院)

専門職学位課程

教員養成に関わる専門職大学院として学校現場あるいは地域が、現在教育に関わる中堅教育に求める実践的能力、問題解決能力等を身につけさせ、学校現場に生起する諸課題を、学校全体を視野に入れて、解決へと導かせる。また、様々な経験や事例を持ち寄り、論理的な検証を加えて、理論と実践を常に往還しながら学校全体で、学校と地域で力を結集して、解決への道を探る。そうした現場における具体的な問題を解決する力量、技量を身に付けるのが「高度教職実践専攻」であり、「学校・地域」をキーワードに教師としての使命を自覚し、授業実践力、学級・学校経営力、生徒指導力、教育相談力、協働遂行力、地域教育連携力を身につけさせることを目的とする。

▶高度教職実践専修:小・中・高教諭専修免許状等を取得

中堅教員(スクールリーダー)に求められるもっとも基本的な力量を「学校教育と教員の在り方に関する領域」、「教育課程の編成・実施に関する領域」、「教科等の実践的な指導方法に関する領域」、「生徒指導、教育相談に関する領域」、「学級経営・学校経営に関する領域」、「特別支援教育に関する領域」の6領域に定め、自らの課題を深く研究する能力を身につけつつ、それ以上に、学校現場での多岐にわたる課題を、学校全体を常に見渡して、教師の協働によって解決していく資質・能力・力量を磨くことを主眼とし、ストレートマスター対象の「教職基礎力高度化コース」、現職教員対象の「教職実践力高度化コース」「学校改善力高度化コース」の3コースを設定して、総合的力量的育成と併せて、教職経験に応じた自己の課題を探求を通して地域・学校でリーダーとして活躍する人材を育成する。

- ◇札幌校、旭川校、釧路校の3キャンパスで開講
- ◇夜間開講コースあり
- ◇長期履修制度あり

大学院教育学研究科

修士課程

学校教育の高度化と多様化の進展に対応し、教育の場における理論と実践にかかわりのある学術諸分野の総合的・学問的な研究・教育を行うことにより、高度な能力、識見と実践力を有し、併せて地域文化の向上に寄与できる専門的知識を備えた教員の養成を目的とする。

学校臨床心理専攻は、主として小・中・高等学校等の現職教員及び社会人を対象として、いじめ、不登校、特別な教育的ニーズへの対応等、児童生徒の成長発達とこれに対する指導援助にかかわる学校教育の諸課題に関して、教育臨床的アプローチを有効に進めることのできる人材養成を目的とする。

▶学校教育専修:特別支援学校教諭専修免許状を取得

教育学、教育心理学、障害児教育学を核として構成されるが、そこでの研究は学校教育における諸問題を理論的・実践的に深く究明するとともに、生涯学習、社会教育、福祉教育といった広い観点からも、今日の人間形成にかかわる基本問題を研究する高度な専門能力の形成を図る。

- ◇札幌校(岩見沢校と連携)、旭川校、釧路校、函館校の5キャンパスで開講
- ◇夜間開講コースあり
- ◇長期履修制度あり

教職大学院教員紹介:札幌校

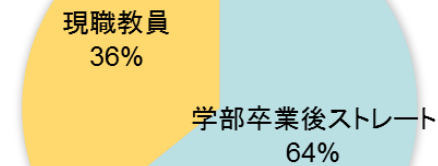
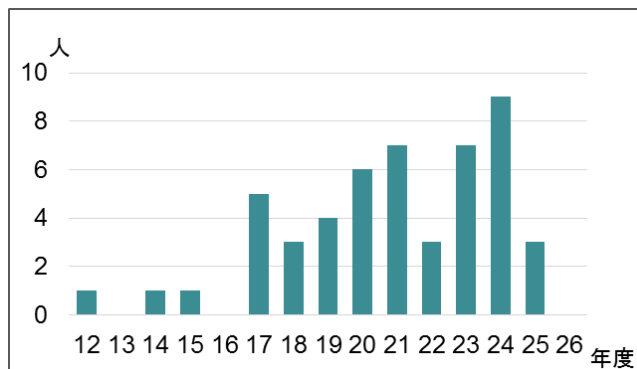
小野寺 基史(特別支援教育、障害児心理学)

特殊学級や児童精神科に併設された分校、教育センター教育相談室で30余年、障害のある子どもの教育や教育相談に携わってきました。不登校や発達障害の子供のアセスメントと適切な指導・援助、望ましい教育相談の在り方等について一緒に考えていきましょう。

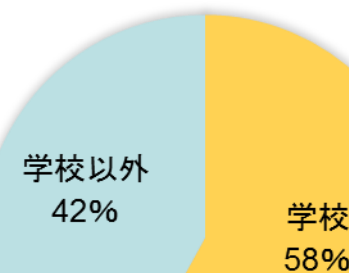


特別支援教育分野の特色：札幌校・旭川校・函館校

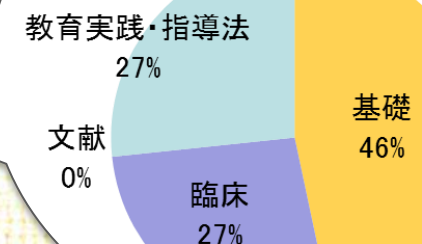
大学院修了生の推移(総数52名)



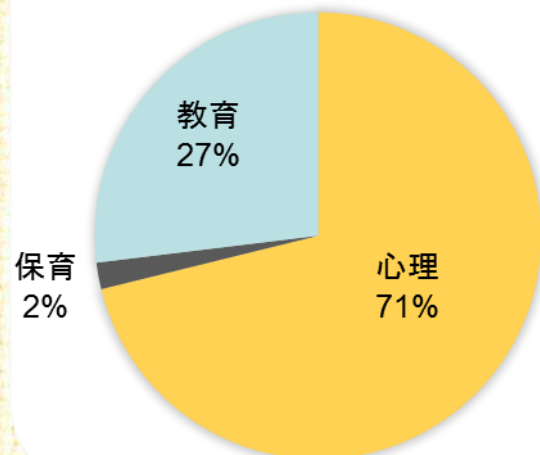
研究フィールド



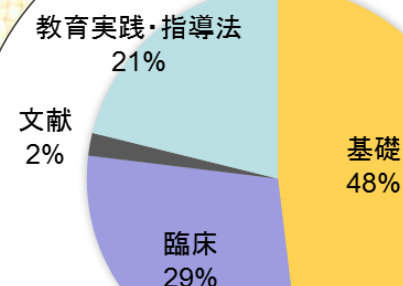
学校をフィールドとした研究の種類



研究テーマ



研究の種類



現職教員の選択した研究の種類



修了後の進路例(現職教員以外)

特別支援学校教諭
小学校教諭(特別支援学級・通常学級)
高等学校教諭
地方公務員
障害者福祉施設
国立特別支援教育総合研究所
大学教員 等



院生同士でプレゼンテーション

あ あなたの現場に興味を持った研究テーマを大学院で深めてみませんか？
北海道教育大学の札幌・岩見沢校、旭川校、函館校には修士課程の大学院、札幌キャンパス内にある教職大学院では、特別支援教育に関する様々なテーマを深めることができます。

詳しくは大学ホームページの大学院紹介をご覧ください。

<http://www.hokkyodai.ac.jp/faculty/post/>

修士論文テーマ(平成20～27年度): 札幌校・旭川校・釧路校・函館校

	タイトル	研究方法
札幌	特別支援教育における校内支援体制と具体的支援に関する考察～Y小学校における取組を通して	調査事例
札幌	成人アスペルガー症候群の視覚順序判断の弁別特性および聴覚的文脈の影響について	実験
札幌	通常学級に在籍する重度・重複障害児への教師の戦略	事例アンケート
札幌	知的障害児の体力づくりに関する研究～学校生活における身体活動の分析を通して～	事例調査
札幌	生態学的調査に基づいた自閉症のコミュニケーション指導	事例
札幌	重度・重複障害児の個別指導の在り方～「生活」「発達」「コミュニケーション」に重点をおいた指導の検討	事例
札幌	特別支援学校における幼児期の支援に関する一考察～教育相談機能を活用した幼児期の特別支援教育の試みを通して	事例
札幌	自閉症の反復行動における解釈と活用に関する検討	事例
札幌	高等養護学校におけるソーシャルスキルトレーニングの在り方について～A高等養護学校における指導の試み	事例
札幌	高機能広汎性発達障害者の感情語想起の困難性について-映画の登場人物への感情ラベリングの断片化に与える影響-	実験
札幌	会話場面におけるうなずき動作の同調知覚と対人的協調動作の関連について	実験
札幌	学習支援機能を選択できる時計読みコンピュータ教材の開発	実験 調査 教材作成
札幌	定型発達児における視覚-聴覚統合能力と読みの関係	実験
札幌	重度心身障害者のリーチ動作を発現させる視覚条件	実験
札幌	高等学校の発達障害の生徒に対するエンパワーメント授業開発に関する研究	授業研究
札幌	A市教育委員会における就学判断に関する一考察～就学指導から就学後1年間の追跡調査を通して	調査
札幌	特別支援学級における自己決定の指導～拒否カードを使用した選択決定を通して	事例
札幌	小学校特別支援教育コーディネーターの役割における連絡・調整機能に関する考察	調査事例

	タイトル	研究方法
札幌	身体運動再認課題における自己運動の優位性について-アニメーション動画を用いた健常成人とアスペルガー症候群の比較検討から-	実験
札幌	自閉症スペクトラム児の母親の情緒応答性と育児ストレス・養育態度との関連について	実験
札幌	知的障害と自閉症を併せ持つ生徒に対する運動指導方略の検討ー身体模倣に着目してー	実践
旭川	自閉症スペクトラムを持つ成人期の人達の表情と声の認知特性	実験
旭川	小学校における特別支援教育コーディネーターの役割について	調査
旭川	発達障害のある生徒の学習特性に対応した学習支援	調査
旭川	重度・重複障害児のニーズに応じた授業づくり-認知特性の評価に基づく学習の実践-	調査
旭川	我が国の学校現場における介入研究に対するシステマティック・レビューー事例実験から得られたエビデンスの統合を目指して-	調査
旭川	学習に困難さをもつ発達障害児への学習支援	調査
旭川	発達障害の特性を示す幼児を含む集団保育の課題の検討	調査
旭川	児童生徒の行動問題の解決を目的とした教員研修プログラムの開発と効果検討	実験
旭川	発達に困難を示す子どもに対する感覚特性の評価とそれに基づく支援の検討と考察	調査
旭川	知的障害特別支援学校の校内研究を通じた授業改善の試み～児童生徒の「自発性」と「般化」を促すための環境設定と教授行動に関する検討～	実験
函館	特別支援学校と家庭における日常生活スキルの指導・支援に関する考察ー担任と保護者への調査結果をもとにした指導プログラムの実践を通してー	調査
函館	高等学校の特別支援教育を推進するための校内支援体制の促進に関する実践的研究～高等学校に在籍する生徒の実態把握から具体的支援ツールの活用を通して～	実践
函館	発達障害児の実行機能の評価と介入のための支援プログラムの検討	実験
釧路	学校生活における自閉症児の自己決定行動の検討ー他者との情動的係に着目してー	実践
釧路	知的障害特別支援学校における体育授業づくりに関する研究ー運動の魅力に焦点をあててー	実践

北海道教育大学札幌校附属 特別支援学級（ふじのめ学級）

ふじのめ学級

ふじのめ学級は、北海道教育大学 附属札幌小学校・附属札幌中学校に設置された特別支援学級です。特別支援学級としての活動を基盤にしながら、通常の学級との交流・異学年間の交流等 子どもたちに「かかわり合い」を育む教育を重視して取り組んでいます。

一目指す子ども像

- 仲間とかかわり合いながら、よりよい課題解決に取り組む子ども
- 学校生活で得られた学びを家庭や地域での生活に活かす子ども
- 自分の活動を振り返りながら、自分のことが分かり進んで活動に向かう子ども

小 学校特別支援学級で求める子どもの姿

- 友達と一緒に考えたりしながら、課題を解決しようとする姿
～友達と共に活動する子ども
- 学校で学んだことを、実際の生活でも活かそうとする姿
～生き生きと生活する子ども
- 自分の判断や行動を振り返り、次に活かそうとする姿
～自分で進んで取り組む子ども

<学級編成（平成27年4月）>

学級	小1組		小2組		小3組		計
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
男児	3名	2名	3名	3名	2名	3名	16名
女児	1名	1名	0名	1名	0名	0名	3名
計	4名	3名	3名	4名	2名	3名	19名



ふじのめ学級の校舎



ふじのめ学級児童の作品「運動会」

<年間行事>

- 5月：畑活動・プール学習
- 6月：校内宿泊学習
- 10月：レインボーピック
- 11月：ふじのめ祭り
- 12月：クリスマス会
- 2月：校外宿泊学習・ふじのめスノーフェスティバル

ふ じのめ学級での学び

- 日常生活の指導
学校生活で繰り返して行う諸活動を通し、身辺処理能力や、集団生活に必要な技能を進んで取り組む気持ちをはぐくむ。
- 生活単元学習
一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的にはぐくむ。
- 教科別の指導
各教科の特色を生かし系統的な指導を行う。特に、国語、算数については子どもの実態に応じたグループを編成する。
- 特別活動
学級活動や普段と異なる集団や場面での活動を通して経験を広げ、適応する力や進んで参加する態度をはぐくむ。
- 総合的な学習の時間
児童の興味や関心、ニーズに基づいたテーマを設定し、他の教科や領域の学習と関連づけた活動を通して、生きる力をはぐくむ。
- 外国語活動
外国語に対する興味・関心、理解を体験的に深め、他者とかかわりながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、外国語に慣れさせながらコミュニケーション能力の基礎をはぐくむ。



国語の授業風景
「にじいろのさかな」

北海道教育大学札幌校附属 特別支援学級（ふじのめ学級）

中学校特別支援学級で求める子どもの姿

- 集団の中で自信をもって自ら取り組もうとする**意欲のある生徒**
- 安定した気持ちで人とのかかわり合いながら行動する**仲間と協調できる生徒**
- 身に付けた力を活かし、最後まで活動に取り組む**自分で考えて行動できる生徒**

＜学級編成（平成27年4月）＞

学級	1年D組	2年D組	3年D組	計
男児	6名	5名	2名	13名
女児	1名	3名	4名	8名
計	7名	8名	6名	

＜年間行事＞

- 5月：宿泊学習・修学旅行
- 6月：現場実習・職場見学
- 9月：レインボーピック
- 11月：ふじのめ祭り
- 2月：ふじのめスノーフェスティバル
レインボーフェスティバル



数学の授業風景「繰り上がりのある足し算」



英語の授業風景「TRAVEL」

ふじのめ学級での学び

○日常生活の指導

身辺生活の処理にかかわる技能や集団生活・社会生活に参加する力を高め、日常生活をより自立的・発展的に送るための生活意欲や生活態度を育てる。

○生活単元学習

生活的な課題を解決するための一連の学習活動を通して、経験の拡大を図りながら自立的な生活に必要な基礎的能力を養う。

○作業学習

「製品作り」「作物栽培」とその「販売」「収穫」という生産的活動を中心とした作業学習を通して、職業生活及び家庭生活に必要な基礎的・基本的知識技能の習得を図り、勤労を重んずる望ましい作業態度の育成と身に付けた力を生活で実際に使うことができる社会適能力を培う。

○教科別の指導

各教科の特色を活かし系統的な指導を行う。特に、国語、数学については生徒の実態に応じたグループを編成する。

○特別活動

望ましい集団活動を通して、調和のとれた心身の発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員として他と協力し合いながら自主的に活動しようとする態度や社会性を養う。

○総合的な学習の時間

生徒の興味や関心、ニーズに基づいたテーマを設定し、他の教科や領域の学習と関連づけた活動を通して、生きる力を養う。

入学選考について

学級見学 ＜必須＞

保護者の方に教育方針・教育活動等をご説明し、授業の様子や施設を見学していただきます。

教育相談 ＜必須＞

保護者の方からお子さんの学校・家庭生活の様子をお聞きするとともに、お子さんとの面談を行わせていただきます。

体験入学 ＜希望者＞

お子さんが本学級の児童生徒とともに授業と給食に参加し、本学級の生活を体験していただく場です。保護者の方にもその様子を見学していただきます。

北海道教育大学附属 特別支援学校(函館)

特別支援学校

特別支援学校は、北海道教育大学の附属学校として、障がいのある児童生徒の教育の理論及び指導・支援の実践に関する実証的実践研究を行います。本校は、特別支援学校として、本校学校教育目標に基づき、知的障がい及び自閉症の児童生徒に対し、小学校、中学校、高等学校の教育課程に準じ、一貫した教育課程により、可能な限りの社会参加と自立を目指し、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を行います。

— 目指す児童生徒像 —

- 自分らしい学び方を身に付ける児童生徒
- 自分の良さを発揮する児童生徒
- 自分の生き方を見つけ、自己実現する児童生徒
- 地域と共に、地域で暮らす児童生徒

学 校経営の基本方針

- 知的障がいおよび、自閉症教育における「学びの支援」を重視した実践の充実
- 社会参加を目指した実践的な教育の推進
- 人とのかかわり合う力の育成
- 家庭・地域の教育力向上を支援する教育活動の展開

<体育祭>



待つ場所や順番をわかりやすくしたり、見通しが持てるような工夫



<文化祭>



体育活動で学んだダンスや音楽活動で学んだ合唱、合奏、制作活動や表現活動で作り上げてきた作品を発表



入学までの流れ

学校見学会

教育相談

入学者
選考説明会

入学者選考

学びの環境



小学部の教室

活動エリアは用途別に分かれており、刺激が少ない環境で、学習に専念できます。一人一人のスペースも大事にしています。



中学部の教室

同学年の仲間と関係が深まるように、発達に応じてかかわりが生まれる環境を設定しています。



高等部の教室

社会人になることを考え、異学年の仲間と休憩時間を過ごすことができるようにしています。



いろいろな教室

クラフトルーム(左)や木工室(右)では就労に向けて職場での様々なスキルを学習できます。社会人として必要な技術や態度を実践的に学べる環境です。

特別教育支援プロジェクト

どんなプロジェクト？

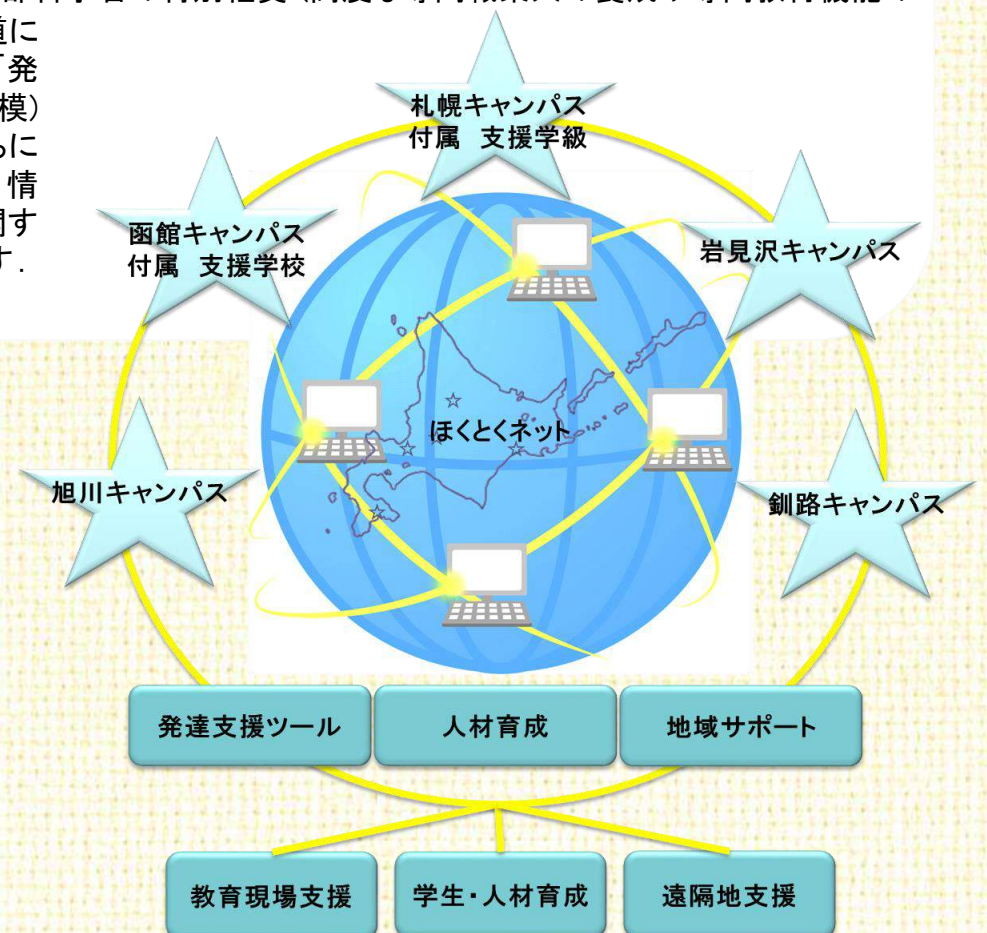
大都市の札幌圏と地方の中核都市とともに、広大な地域にへき地・小規模学校が多数ある北海道では、気候風土とともに地域の特性も大きく異なることから、地域の特性に合わせた特別支援教育の支援体制を構築する必要があります。さらに小規模学校には特別支援教育に関する専門的能力のある教員が必ずしも配置されておらず、通常学級で学ぶ発達障害児への教育を困難なものにしています。このことは、普通学校においても特別な支援を必要とする児童生徒の教育に関する専門的知識を持つとともに、実践的かつ具体的な対応方法を習得した上で、地域の特別支援教育をリードしていく人材の育成が必要とされていることを示すものです。各地域に特別支援教育に関する専攻・分野を有するキャンパスを展開し、附属特別支援学校や特別支援学級を有する北海道教育大学には、その人材と機能を生かしつつ高度な実践力を持つ教員を養成するとともに、地域への情報提供を進めることが求められています。このような問題の背景から、本プロジェクトは、文部科学省の特別経費（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実 平成22年度、23年度）を契機に、全学組織により特別支援教育プロジェクトを編成することで、北海道における特別支援教育の推進を図ろうとするものです。プロジェクトの推進にあたっては、旭川に拠点を置く「発達支援ツール作成部門」、函館・札幌に拠点を置く「人材育成部門」、釧路に拠点を置く「地域（僻地・小規模）サポート部門」を構成し、附属校とともに教員の横断的組織により調査研究・実践をおこなっています。さらに特別支援教育に関する情報サーバを構築し、これらの情報や特別支援教育における教材などについて、情報発信の拠点の形成を図るべく計画を進めています。さらに平成27年度から文部科学省の「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業（教職員育成プログラム開発事業）」に取り組んでいます。

教職員育成プログラム開発事業とは？

小・中学校の通常の学級においては、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒は6.5%程度の割合で在籍していることが明らかになっています。同時に、それ以外にも学習面や行動面で何らかの困難を示していると教員が捉えている児童生徒がいることが示唆されており、すべての学校・学級において、これらの児童生徒に対する支援が、喫緊の課題となっています。

そのため、通常の学級において、学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒に対して、それら児童生徒が理解しやすいよう配慮した授業等、指導方法の改善等を行う研究事業を実施するとともに、教員に発達障害に関する正しい理解を図るための理解推進拠点事業や発達障害に関する専門的・実践的知識を有する教職員を育成するためのプログラム開発を行います。

（文部科学省HPより：<http://www.mext.go.jp/>）



特別支援教育プロジェクト:発達支援ツールの開発

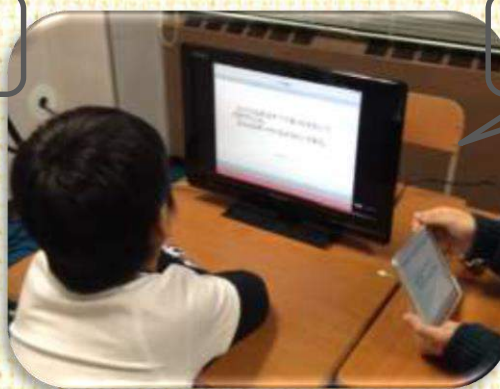
携帯型端末を利用した学習指導の方法の検討(函館校)

これまでの「携帯型端末(I Pad mini)」を使用した実践では、教材の提示等、狭義の意味で視覚的なツールとして用いてきたが、昨年度より携帯型端末を活用した支援方法の検討について実践を通して検証を進めている。実際の臨床場面で、子どもの教育的ニーズに合わせた活用やよりわかりやすい視覚的なツールとして効果的に活用できたことから、本年度も携帯型端末の活用について幅広く検証がすすめられた。

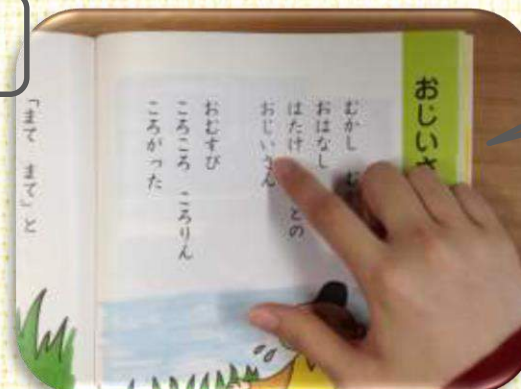
携 帯型端末を利用した学習指導の方法について、実際の臨床場面での活用を試み、地域への還元の方法について検討した。その結果、大学での指導事例をもとに地域の小学校へ方法論を提供し、地域の学校(特別支援学級)で携帯型端末を用いた授業実践を実施。また、日常の臨床授業の中でも積極的に活用し、学士論文へとつながっている。さらには、現職教員を対象とした研修会においても、大学での指導事例を報告した。これまで、大学内での指導方法を地位の学校に提供する場面が少なかったが、携帯型端末を利用した指導事例や指導方法を地域の特別支援学級に還元できた事は大きい。さらに、日常の臨床指導の中でも、これまで学習(特に書字や音読など)に躓きを示し学習意欲が低下していた児童に対しても効果的であり、学習に取り組む姿勢を構築することができた。



書字学習の事例



音読学習の事例



教科書を題材とした音読学習教材

これらの成果については、現職教員を対象とした研修会「幼児児童生徒の長所を活用した授業づくりと指導」にて大学での臨床成果を紹介するとともに、実際の教材づくりについて演習を通して紹介した。(北海道特別支援教育センター: http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=29 (2015/1/16更新)) さらに指導事例を提供した地域の学校(特別支援学級)で携帯型端末を用いた授業実践を実施して、一定の学習効果をあげているとの報告を得ている。

これまで学内での指導方法を地域の学校に提供する場面が少なかったが、携帯型端末を利用した指導事例や指導方法を地域の特別支援学級に還元し、実際の教育場面で展開できた事は大きい。また、日頃の大学での臨床授業の中で活用し、卒業論文を執筆できた事は大きな成果である。特に音読の苦手な児童への指導や日常生活スキルの獲得にむけた動画を用いた指導では、一定の成果を挙げると共に実際の教育現場でも活用できる臨床力を身につけることができた。



携帯型端末を用いた音読



携帯型端末とモニターを用いた授業

特別支援教育プロジェクト:人材育成

教育実習の質的向上と研修コンテンツの開発(附属ふじのめ学級・札幌校)

平成27年度は、札幌附属小学校・中学校ふじのめ学級と大学の連携によって、教育実習の質的向上と現職・学生を対象とする研修コンテンツ開発と全道教育研究大会を開催した。教育実習は平成27年度8～9月に特別支援教育専攻2年次全員がふじのめ学級において3週間実施した。全道教育研究大会は、平成27年度11月11日にふじのめ学級の開級50周年記念研究大会として開催した。

教 教育実習では、研究授業の準備段階で実習生自身の授業を撮影し、映像による振り返りを行った。これにより、自分では気づかない声の大きさやスピード、授業時に見逃した児童生徒の反応や発話を確認することができ、有意義であった。また事後指導の一環としてふじのめ学級が主催する研究大会に参加し、会場設営や授業の撮影などを行った。



「朝の会」の一場面



「数学」の一場面



「音楽」の一場面

全 道教育研究大会では、研究主題「自分らしさを志向し続ける子どもを目指して～豊かな“ことば”がつながる授業づくり」をもとに授業公開と研究協議を行った。参加者は全道・札幌市内から特別学級教員・通常学級教員や教育委員会その他の教育関係者を含めて211人が参加し盛況となった。研究大会の様子は、日刊紙の北海道通信の紙面において、12月3日付の「道教育大附属札幌小中・ふじのめ学級の研究概要【上】豊かなかわりあいを通して」および、12月4日付には「道教育大附属札幌小中・ふじのめ学級の研究概要【下】“考えや思い”発揮できる支援」として2日間にわたって大きく報道され、注目されることとなった。教育実習の質的向上という側面では、実習校のふじのめ学級との共同研究によって、実習の意図や目的を共有し、より効果的な学生指導のための情報を共有することができた。ふじのめ学級が取り組んだ研究主題「自分らしさを志向し続ける子どもを目指して～豊かな“ことば”がつながる授業づくり」の実践研究では、主に国語や数学(図形)において「豊かな“ことば”」で児童生徒が自分の「考えや思い」をもって「ひと・もの・こと」と豊かに関わりあいながら活動する子どもたちの姿を引き出すことができた。しかし、「实际的な経験が不足しがち」と言われる知的障がいの子どものたちにとって大切な「实际的・具体的内容」の指導についても、「なってみる」「引き付けて学ぶ」という考えで検討しなければならないことも分かってきた。引き続き来年度の研究大会に向けて、継続的な教材・授業研究を推進していく。



【ポスター発表】
附属特別支援学校(函館校)との共同研究などを発表しました



【交流タイム】
実際に教材に触れながら
授業者に質問できる貴重な機会

特別支援教育プロジェクト:地域支援に関する実践

インクルーシブ子育て支援「キンダーぷらっつ」

インクルーシブ子育て支援「キンダーぷらっつ」を札幌校臨床スペース小ホール・遊戯室にて実施,平成27年度は毎月1回,計11回実施し,地域の親子,延べ約200名が参加した。札幌校に設置された特別支援教育臨床スペース(小ホール・遊戯室)を活用し教員,学生が休日の遊びの支援を実施した。

平成27年度活動の実績

	日時	時間	活動内容
1	4/19(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン他
2	5/17(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン他
3	6/21(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン他
4	7/19(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
5	8/23(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
6	9/20(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
7	11/15(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
8	12/23(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
9	1/24(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・ロープ他
10	2/21(土)	10:00-14:00	トランポリン・クライミング他
11	3/21(土)	10:00-14:00	トランポリン・エアポリン・光と音楽 他



トランポリンやクライミングで自由に遊びます



子どものアイディアでチーム対抗ホッケーリレー

アダプテッド・スポーツクラブの実施

万人に対するスポーツ機会の提供とそれによるスポーツ文化の振興を目指し,北海道教育大学岩見沢校の体育施設を活用し,月1~2回程度スポーツ活動を実施した。市内社会福祉施設と連携し,岩見沢校学生の協力を得ながら,参加者のニーズに応じて活動を行った。

平成27年度活動の実績

日時	時間	参加	活動内容
4/16(木)	10:30-12:00	25名	スポンジテニス・バドミントン・卓球・エアロバイク等
5/21(木)	10:30-12:00	26名	スクーターボード・フライングディスク・ボールプール等
5/27(水)	13:00-14:30	15名	スラックライン・スポンジテニス・軽スポーツ等
6/2(水)	16:30-17:30	7名	ボクササイズ
6/18(木)	10:30-12:00	28名	卓球・ボクササイズ・エアロバイク・軽スポーツ等
6/24(木)	13:00-14:30	22名	電動車椅子サッカー
7/16(木)	10:30-12:00	23名	バスケットボール・ボッチャ・卓球・ボール運動等
9/17(木)	10:30-12:00	23名	マシントレーニング
11/19(木)	10:30-12:00	25名	バランスボール・スラックライン・ボール運動等
12/4(金)	19:00-20:30	25名	ティーボール
12/11(金)	19:00-20:30	17名	ティーボール
1/21(木)	10:30-12:00	24名	ボール運動
1/29(金)	19:00-20:30	16名	ティーボール
2/12(金)	19:00-20:30	12名	ティーボール
2/20(土)	10:30-16:00	多数	「アダプテッド・スポーツ広場」※あそびプロジェクト企画
3/4(金)	19:00-20:30	12名	ティーボール



ティーボールやボッチャ, いろいろな遊具を使った活動 等を行います

特別支援教育プロジェクト: 調査研究と情報収集

日本特殊教育学会第53回大会(平成27年9月19-21日 東北大学)

第36回医療体育研究会/第19回日本アダプテッド体育・スポーツ学会(平成27年11月28-29日 神奈川工科大学大学)

北海道における地域特性に応じた情報システムの構築

発達障害の理解に関する人材育成に向けて

○安井友康・青山真二・齊藤真善・萩原拓・森島英史・小淵隆司・阿部美穂子・五十嵐靖夫・北村博幸・細谷一博・大山祐太(北海道教育大学) 小野寺基史(北海道教育大学教職大学院)

KEY WORDS: 発達障害 地域特性 情報システム / ほくとくネット (www.hokutoku.net)

【目的】

特別な教育的ニーズのある子どもやその保護者に対して、地域の特性に応じた教育的資源を提供できる体制づくりが求められている。とりわけへき地・小規模学校が多数ある北海道では、広大な地域における教育ニーズに応じた専門職員の支援・サポート体制を構築する必要がある。システム構築の背景には、情報共有の難しさから学校が地域の教育・福祉資源と実際の連携を取れないという問題がある。特に障害の偏在化や発達障害などに対応した支援ノウハウの蓄積や情報共有が求められている。

そこで北海道教育大学特別支援教育プロジェクトとして、特別支援に関する情報提供のシステムを開発するとともに、孤立した状況に置かれ、学力格差も生じがちな遠隔地の小・中・高等学校と特別支援学校を包括する地域支援システムの構築に向けた取り組みについて報告する。



広域の地域ニーズ

【方法】

プロジェクトの推進にあたっては、「発達支援ツール作成部門」、「人材育成部門」、創設に拠点を置く「地域(僻地・小規模)サポート部門」を構成し、附属校とともに教員の横断的組織により調査研究・実践をおこなった。収集されたデータや情報は、専用のサーバ「ほくとくネット」に掲載され、随時、情報配信を行った。

【取り組みの実績】

1. 研修会の開催

北海道内各地で発達障害やインクルーシブ教育に関する理解を促すための講習会が実施された。北海道北部の地区では「平成26年度子ども発達支援合同研修会」が開催され270名を超える参加者があった。(釧路地区)

2. 携帯型端末を利用した学習指導の方法の検討

『発達支援方法及び検討』として「携帯型端末(I Pad mini)」を使用した実践において教材の提示等、“視覚的なツール”として用いるとともに、携帯型端末を活用した支援方法の検討についても実践を通して検証が進められた。実際の臨床場面でも、子どもの教育的ニーズに合わせた活用を行い、携帯型端末の活用について幅広く検証がすすめられた。(函館地区)



3. インクルーシブ子育て支援・発達障害児者の体操教室

臨床スペースにて、平成26年度は毎月1回、計11回、地域の親子、延べ約200名が参加して実施された。また体操教室も8回実施された。スタッフ、学生の参加のもと、地域の教育・支援ニーズに対する支援を行うとともに、実践力の向上や大学機運の活用に関する基礎的な情報の収集を行った。(札幌地区)



4. アダプテッド・スポーツクラブの実施

万人に対するスポーツ機会の提供と、それによるスポーツ文化の振興を目指して障害児者のスポーツ支援が実施された。「楽しんでいたら意図せずにいらい運動になっていた」という状態を目指して活動が行われた。(岩見沢地区)



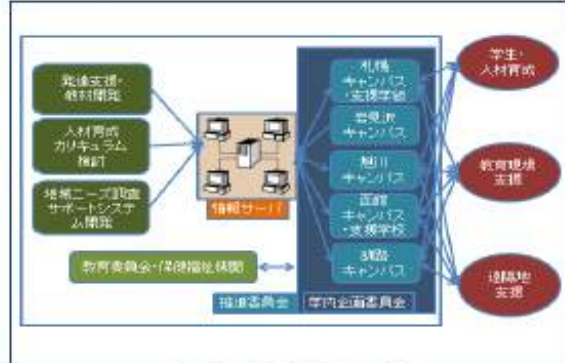
5. 道東地域の発達支援ニーズへの対応

研究会として「へき地・小規模校を抱える自治体における就学前から学童期の育児・発達支援と地域教育機関の支援及び連携のあり方に関する縦断的研究・支援機関と地域教育機関との協働による支援事例の検討を中心に」が実施された。また障害児のきょうだいキャンプが地域の保護者、関係機関と共同で取り組まれた。(釧路地区)



6. 情報システム

地域の特別支援教育に関する情報や教材、講演会やイベント情報については「ほくとくネット」に掲載され、情報発信の拠点の形成とサイトの構築が進められた。



プロジェクト全体の概念図

【考察】

北海道という広域で多様な地域特性を有する地域に対し、それぞれの地域で実施された活動や情報提供について、情報サーバ「ほくとくネット」を介して情報配信が行われた。システムの構築により、広域・小規模という地域的な課題を共有することにつながった。今後に向けて、さらに情報内容の充実、ニーズに合わせた内容の構築、新しい情報の継続的掲載などを行うことが求められる。さらに通常学級の教員などに対する発達障害の理解と支援方法に関する内容の情報提供システムの構築について、検討を進める必要がある。

補記

本取り組みは、北海道教育大学中期計画実施経費ならびに文部科学省「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業(教職員育成プログラム開発事業)(平成27年度-)」の補助を受けて実施されている。

特別支援学級におけるトランポリン運動—跳躍動作の変化に着目して—

池田千紗¹⁾ 安井友康¹⁾ 金澤恵美²⁾ 平山一馬²⁾ 中嶋秀一²⁾ 松田岳大²⁾ 山本理人³⁾

1)北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻
2)北海道教育大学付属札幌小学校 特別支援学級
3)北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツ文化学科 スポーツ文化専攻

➤ 研究背景



筋緊張が低い 姿勢を保てない、疲れやすい
バランス機能が未熟 転びやすい、粗大運動が苦手
協調運動が拙劣 巧緻動作が苦手

◆トランポリンを用いたアプローチ

トランポリンは狭い場所でも手軽に実施でき、安全に楽しめる遊具
健常児と発達障害児を対象としたアプローチの効果検証

特別支援学級の体育の授業でトランポリン運動を行い、授業前後での跳躍動作の変化を分析した。

➤ 研究方法

◆跳躍動作の分析

> データ収集

跳躍動作は右側方からビデオ撮影し、記録
授業の初回と最終回の跳躍動作を分析対象とした

> 分析方法

跳躍が安定してから跳躍3回分を選択
二次元動作解析ソフトFrame-DIASで分析

1) 跳躍3回分の跳躍の高さの変化 2) 股関節と膝関節の屈伸角度の変化



◆被験児・者

特別支援学級に在籍する児童6名(男児)

Case	年齢	性別
Case1	1年	—
Case2	1年	77(鈴木ビネー)
Case3	2年	65(田中ビネー)
Case4	2年	58(新坂X3)
Case5	4年	95(WISC-IV)
Case6	5年	—

—:認知機能検査未実施で不明

◆課題

競技用トランポリン上で10回跳躍を行う
指示:なるべトランポリンの中央で、
手を前から上に挙げて真っ直ぐ高く跳ぶ

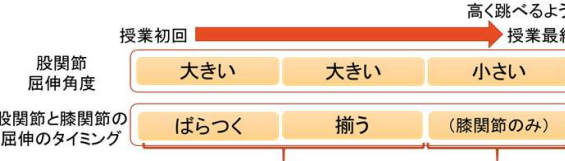
◆環境

教師がトランポリン前方から繰り返し跳び方を教示
児童はトランポリンとその他の器械運動を自由に選択し、実施できる
授業時数は1回45分間、週3回、4週間(計12回実施)

> 倫理的事項

北海道教育大学札幌校倫理委員会の承認を得て実施した
(承認番号:北教大研倫2015091003)

➤ 考察



授業初回 → 高く跳べるようになる → 授業最終回

股関節 屈伸角度: 大きい → 大きい → 小さい

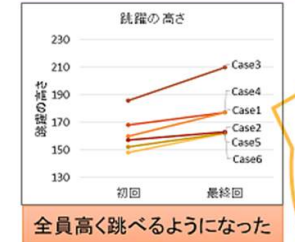
股関節と膝関節の屈伸のタイミング: ばらつく → 揃う → (膝関節のみ)

運動が苦手 → 運動が得意

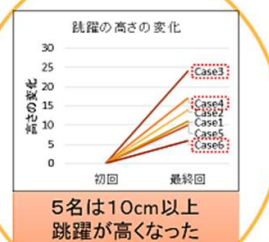
日常生活で示される運動の苦手さに関わらず
跳躍動作が変化し、高く跳べるようになった
⇒効率的な跳躍方法を習得できた可能性がある

➤ 研究結果

跳躍の高さの変化

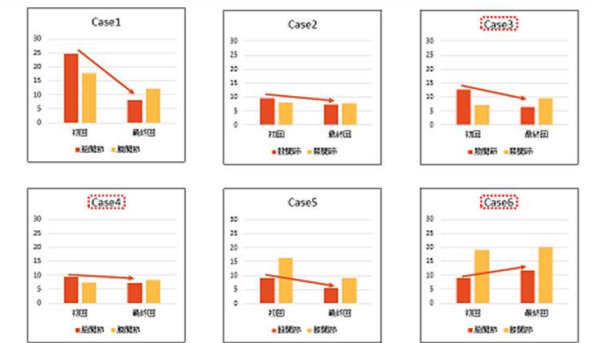


全員高く跳べるようになった



5名は10cm以上跳躍が高くなった

跳躍動作の変化



跳躍動作の経時的変化

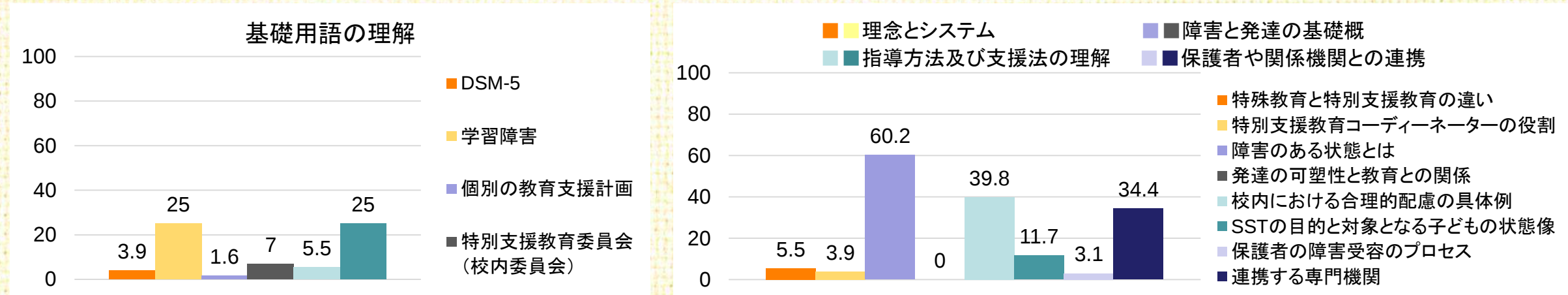


特別支援教育プロジェクト: 学生・人材育成

学部における養成プログラム「特別支援教育Ⅱ」(札幌校)

平成27年度の北海道教育学部札幌校の講義「特別支援教育Ⅱ」において実施した「発達障害及び関連領域の理解についての調査」結果、及び「理解度テスト」の内容についてまとめた。札幌校では平成28年度より専門科目の中の教育実践フィールド科目の一つとして特別支援教育の科目が必修化されることとなり、対象は、2年次とし、毎年270名が受講することになる(講義名「特別支援教育」)。そこで平成27年度に礎開発学習専攻と特別支援教育専攻の2～4年次の学生を対象に専門科目(選択)として開講した「特別支援教育Ⅱ」の受講者130名程度にたいして、次年度に必修化に向けて、「発達障害及び関連領域の理解についての調査アンケート」により学生の知識・考え方についての実態把握を行い、その結果をもとに講義内容を組み立て、講義内容の重点化を行う項目を決定することにした。

発達障害及び関連領域の理解についての調査アンケート



<基礎用語の知識>

全般的に低かった。診断名や職種についての知識が若干高めになっていたが、その内容は、状態像の把握にとどまっており(例えば、学習状態＝学習が遅れている)、背景にある認知特性等に触れたものはなかった。

<理念とシステム>

理念と現行の制度についての知識はほとんどないことがうかがえた。特別支援教育を、特別支援学級や特別支援学校といった、教育を行う場所と結び付けて考えている学生も多く、通常学級において、どの学校種においても整備されるものであるという意識は希薄であることがうかがわれた。

<障害と発達の基礎概念>

回答内容のほとんどは、「学習や日常生活に支障や困難がある状態」といった現象的側面に注目したものや、個人の能力の欠陥を指摘する回答がほとんどであった。環境との相互作用によって状態像の変化が生じることに言及したものが2件あった。

<指導法及び支援法の理解>

「合理的配慮の具体例」についてはほとんどが肢体不自由のバリアフリー化について述べたものであった。発達障害への対応については3件のみだった。障害の特性の理解ではなく状態像の把握にとどまっているため、SSTのような専門的対応について考えることは難しいと推測された。

<保護者や関係機関との連携>

保護者の受容プロセスについて正答は2件のみであった。関係機関は、病院、福祉施設、児童デイサービス、保健所、特別支援学校などが挙げられていた。

講義内容の重点化を行う項目

- 基礎用語については随時丁寧な説明を行うこと。
- 発達障害の特性の理解と根拠に基づいた支援の在り方を考えさせること。
- ライフステージ(幼児期、学齢期、成人期)ごとの発達障害児者の課題を、具体的な事例を通して見通すこと。
特に、小学校入学前の乳幼児期の発達とその課題について、保護者支援の在り方と関連させて詳しく説明すること。
- 現行の制度や特殊教育の歴史に関する知識は、②、③に関連させて最低限の知識を選んで説明すること。



特別支援教育プロジェクト: 現場教育支援・遠隔地支援

中央小学校校内研修会(岩見沢校)

- テーマ
インクルーシブ教育における「アダプテッド・スポーツ」の可能性
気になる児童の支援方法～不器用さに焦点を当てて～
- 日程
平成27年7月24日, 平成28年1月18日
- 内容
「障害」概念の理解と, 近年の法制度の変遷等について解説し, 「アダプテッド・スポーツ」を活用した児童向けの障害理解授業の事例を紹介した. 体育館でフライングディスクやゴールボール, アンプティサッカーなどの実技をおこなった. 不器用さが目立つ児童への, 具体的な支援方法やトレーニング方法について解説した.

子どもの理解研修会(函館校)

- テーマ
アセスメントを活用し子ども理解を深める
- 日程
平成27年6月13日
- 内容
「コミュニケーションから見た子ども理解」
北海道教育大学札幌校 教授 三浦 哲
「検査結果の解釈から指導の手立てを考える」
札幌市立新川西中学校 教諭 大竹 明子
北海道教育大学教職大学院 准教授 小野寺 基史
(助言)北海道教育大学札幌校 教授 青山真二
「支援モデルによる子ども理解」
札幌大学 非常勤講師 前野 紀恵子



研修会の様子

北海道特別支援教育学会道北部研修会(旭川校)

- テーマ
個別教育支援計画の理論と実施
→障がいのあるお子さんにかかわる方々と特別支援教育にかかわる方々が会し, 各分野から発信するインクルーシブ教育の最新情報を共有し, 連携を深め合う.
- 日程
平成27年10月24日
- 内容
講演:「ドイツのインクルーシブ教育における特別支援学校の役割の変化と北海道特別支援教育学会札幌大会を終えて」
北海道教育大学札幌校 教授 安井友康 氏
シンポジウム:「将来をつなぐ多様な学びとは?」
コーディネーター:北海道教育大学旭川校 教授 萩原 拓 氏
＜高等学校＞ 北海道上川高等学校 教頭 濱田哲也 氏
＜中学校＞ 旭川市永山南中学校 教諭 宮越けんじ 氏
＜小学校＞ 東神楽町立東聖小学校 教諭 岡田則将 氏
＜幼稚園＞ わかば幼稚園 園長 佐藤公文 氏

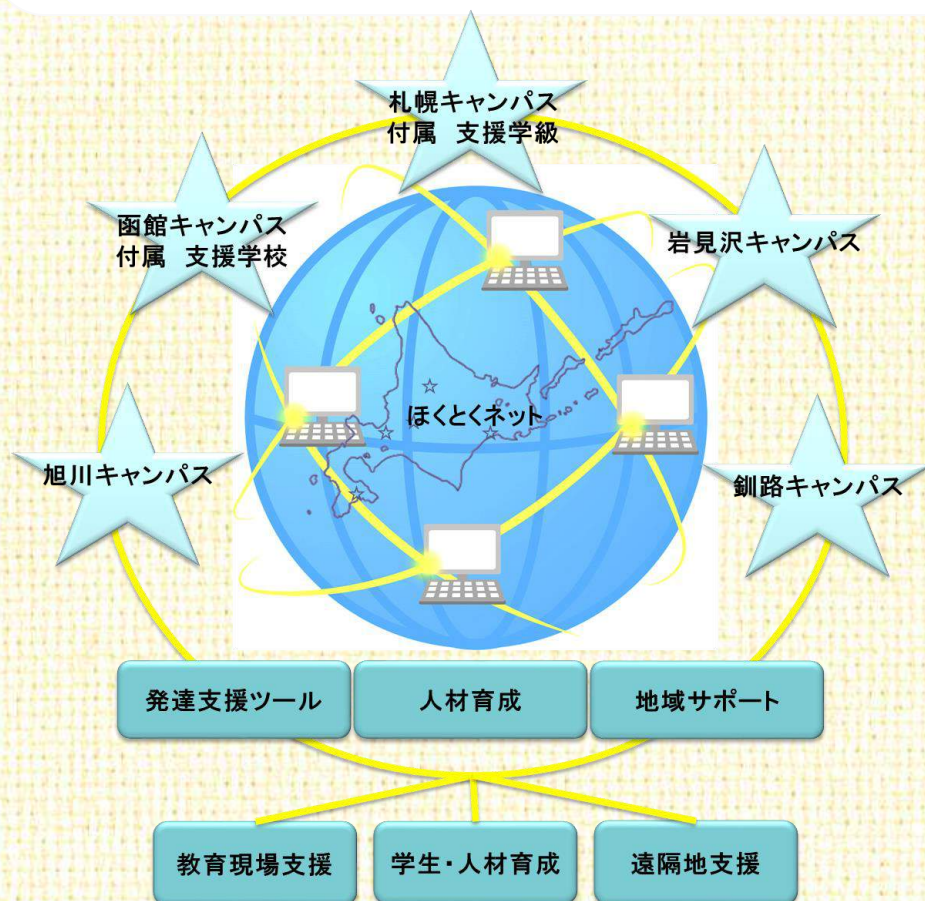
十勝特別支援教育振興協議会研修会(釧路校)

- テーマ
ユニバーサルデザインのある授業・保育～すべての子どもの学びを保障するために～
- 日程
平成28年1月8日
- 内容
発達障害のある子どもが在籍する通常学級, 保育に関わり, 学級作り, 環境作り, 授業作りをユニバーサルデザインの観点から解説した. 「授業のユニバーサルデザイン」は語られるようになったが, 「学びのユニバーサルデザイン」(CAST)という観点を提示し, 子どもの主体や多様性を支持する学校の在り方について検討した.
後半は, 参加者からの質問をベースの「問い」を整理し, ミニ分団協議や全体協議を適宜行い, 参加型の研修とした. インクルーシブ教育, 合理的配慮, ユニバーサルデザイン等に関わる理解を深め, 子ども理解から授業を作っていくことの重要性について確認することができた. また, 通常学級の授業改善としての特別支援教育, また, 授業改善に向かう校内研修の在り方についても検討した.

ほくとくネット <http://hokutoku.net/>

特別な教育的ニーズのある子どもたちの教育支援・教育方法の開発

ほくとくネットは、北海道教育大学5キャンパスおよび附属校の特別支援教育に関わる教員により運営されているインターネットサイトです。教育支援で使える教材や、教育方法についての情報を発信しており、“見た人がほくほく得をする”サイトとなっています。ほくとくネットを通じて、5キャンパスと附属校の教員が情報を共有し、特別支援教育プロジェクトを進めています。誰でも気軽にアクセスできて、大学や大学院での講義内容や研究内容、教育現場で明日すぐに使えるアイデアも多数ご紹介しておりますので、ぜひのぞいてみてください。



ほくとくネットは全道(全国)どこからでも、気軽にアクセスできて、“ほくほく得する”アイデアがいっぱいです。ぜひ活用してください！

□サイトマップ

特別支援教育プロジェクトについて
プロジェクトの内容
各キャンパスの取り組み
アセスメント
発達支援ファイル・ツール
教材・素材
当事者の研究室
トピックス
イベント等のお知らせ
とくしカフェ(ブログ)
リンク集
プロジェクト活動報告

釧路校@各キャンパスの取り組み

□釧路校での取り組みや講義の様子、学生の活動について紹介しています。



教育フィールド研究の様子

デジタル絵カード@教材・素材

□教育目的にあわせて再加工(生徒の障害特性等に合わせた色の変更等)、GIFアニメ化が自由に行えるイラストを提供しています。



身体活動支援(札幌校)@トピックス

□障害のある子どもが利用する運動教具・遊具の利用方法を学ぶ身体活動支援臨床について紹介しています。講義で考えたレイアウトは、キンダーぶらっつで再現され、お子さんが実際に遊びます。



遊具のレイアウト



マットでブランコを作成